

第一問

(五)	か 等 志 る 正 か	(四)	(三)	(二)	(一)
a	た か と 個 当 つ ち 生 い 人 化 て で じ う の さ は 正 た 虚 能 し れ 当 と 構 力 た や 化 し に 差 ゃ さ て 基 ハ れ も づ 考 近 な て く 慮 代 ど し 個 行 さ と よ 人 為 れ は 根 う の の な 遺 と 自 結 い 伝 い 責 果 よ や う 任 と ま こ と て 自 境 こ い 不 由 に う 平 意 よ く 欠 陷 が				機会均等に基づく自由競争が自明とされる米国では、勝敗の原因が個人の才能と努力に帰され、格差と生む社会構造を変革する気運が醸成されながら、近代の個人は自由意志に基いて行動するとされるが、現実には才能や人格、さらには意志よりも遺伝や環境などの外的要因によって形成されるから。平等の実現を囁きて個人の能力を重視すれば、能力の優劣による支配・被支配の構造も不平等社会が、自明の制度として確立してしまうこと。
b					
誕 生					
c					
欠 陷					

第一問

(一)							
(五)	(四)	(三)	(二)	(一)	イ	ウ	エ
維摩の講師は祥延、壹和、喜操、觀理が二の順でつとめるという内容。	いくら隠しても壹和が恨みに思つてゐることを神はお見通しだとうこと。	自分は恨みなどもつはずかないので、巫女の指摘は的外れだと、う主張。	維摩の講師になれば、かたへことを恨みに思う気持ちを、静めようとして。	普通ではな様子の巫女が来て、壹和を指さして言つくとは 人の習性として、恨みには堪えられないものであるので そこもまた恨めしい人ばかりだら、それからどこへ行けようか			

第三問

(一)			
(四)	(三)	(二)	(一)
d	c	a	b
寡が女性を弔うとひざりが解消 <small>メタカラ</small> んだから。	千公は孝行な嫁が姑を殺したという太守の考え方を改められなかつた。千公がひざりは孝行な女性を冤罪で死刑にしたためだと指摘し、後任の長	姑は生き息子の嫁を再婚させようとしたが、嫁は最後まで承知しなかつた。 孝行といふ評判であり	裁判の判決が公平であり 私の世話をしても

第四問

(一)	(二)	(三)	(四)
作品をつくるときには、一個人として言葉を結ぶとする意識は影を潜め ていま、言語共同体に立脚した無名性を感じさせる言葉が立ち現れるから。 不定形な自己の根源性に根ざして、自己を超えた何かを媒介する創作者は、同じ 言語を話す人々と歴史的にも予見的にも縫合として深く結びつくということ。 特定の社会に帰属し、創作者でも読者でもある立場をとる人物を通して、言 語共同体に内在する力が導き出され、人々と広く共有される作品が成立すること。 作品を書く行為は言語共同体に内在する根源的だがに根ざしているが、私的な 文章を書くと主には他者に通じる論理を自分自身で見出す必要があるから。			